

「いやだ。行きたくない」

駐車場の奥から、久しぶりに外に出そうとすると、バイクはそう言っただけで外出を拒否した。

ハンドルに手をかけ、後ろへ引き出そうとした体勢のまま、孝之はかちりと固まった。

すでにU字ロックは外していたし、キーも鍵穴に差し込んである。久しぶりなのでバッテリーが上がっていないかと心配していたのだが、ライトは問題なく点いた。慎重にエンジンを回してやれば、すぐにでも走れる状態のはずだ。

もう一度、ハンドルに力をこめた。

「やだよ。外、出たくない」

引き出そうとする孝之に、バイクは再度、そう抗議した。

400ccの孝之のバイクは、重量もゆうに二百キロを超える。バイクを自転車の延長に捉えて、手で引き回せるものと思っている友人は多いのだが、原付や小型ならともかくこのクラスに

なると取り回しは結構労働だ。この小さな月極駐車場から出すときも、孝之は腰に力を入れて踏ん張り、なんとかよろよろ引き出している。

だから今日もそうした。

でもバイクときたらこうだ。

「やだよ、やめてよ」

もともと車体が重いというのに、そのうえこつも踏ん張られては、引いてもなかなか引き出せない。タイヤは回らず、抵抗するように、わずかにずるずるとコンクリートの上を滑った。

孝之は腰から力を抜くと、ハンドルに手をかけたまま、視線を落とした。

「……なんだこりゃ」

「外になんか、行きたくないよ」

最後に仕舞ったときカバーをかけておいたから、目立つほどの汚れはない。それでもブルーの車体には、細かな砂埃が積もってしまっていた。とはいえそれは何も今回に限ったことではなく、以前から孝之がバイクを外に出すのは、数ヶ月に一度や二度、しかもほんのわずかな距離のことだった。いつか整備をしてくれたバイク屋の店員は、それじゃバイクが可哀相だよと言っていたけれど、買ってみはしたもののそこまでのめりこみはできなかった孝之に、毎週のようにツーリ

ングにバイクを走らせているという店員の気持ちはよくわからなかった。  
スタートスイッチを押してみる。

タンクの下でキュルルル、と空回りするような音がした。スイッチを離すと止まってしまふ。  
さすがに長い間放っておきすぎたから、エンジンも軽快には始動しないのだ。ギアをニュートラルにしたまま、宥め空かすようにアクセルを少しずつ開いていった。なんとか、ブオン、と低い音を引き出す。

よし、いける。問題ない。

腰に力をいれ、

「いやだ。やめて。外で人に会ふの怖い。家にいようよ」

「……………」

孝之はエンジンを切った。

困った。

考えてみれば、半年間も乗っていなかったのだ。

どうやらしばらく外に出さない間に、こいつは対人恐怖症になってしまったらしい。

「…………外、行きたくないのか？」

馬鹿馬鹿しいとは思いつつ、孝之は口を開いた。何処に喋りかけたものやらわからないので、  
なんとなくフロントライトに向かって訊いてみる。

バイクは申し訳なさそうな声音で、

「ごめんなさい。でも怖くて。ぼく、きつと上手く走れないよ」

「いやでも」と孝之は困って腕組みをする。「まあ。大丈夫なんじゃないか。だって、ほら、バイクなんだから」

「でもぼく、あまり出来のいい方じゃないもの」

「出来」

「きつと沢山エンストしちゃうよ。そしたら道路の他のみんなに迷惑かけちゃうしさ。駐車場にいた方がいいと思うんだよ」

「うーん、えっと」

途方に暮れて言葉を探しているうちに、ふと孝之は目を留めた。リアタイヤのホイールに、蜘蛛の巣が絡みついている。

さすがに少しバツが悪く、孝之は屈みこんで巣に手を伸ばした。

小指の爪ほどの小さな蜘蛛が、音もなく動いて孝之に言った。

「おまえのせいなんだからな。こいつがこんな風になっちまったのはなんだなんだ。」

「おまえが、ちつとも外に出してやらなかったせいだ。長いこと世間の風に触れなかったから、こいつ、すっかり臆病になっちまったんだ」

「近頃は、蜘蛛まで喋るのか」

「喋りくらいすらあ。なんだよ、その手。俺の家を取り払おうってか。おまえのバイクの唯一の話相手を、おまえ追っ払おうってんだな」

「な、なんだよ」

妙に威勢のいい蜘蛛だ。

「勝手に人のバイクに巣作っておいて、そういつの、ああいうんだぞ。えっと、盗人猛」

「おまえこそよくそんなことが言えるもんだ。いいか？ 数日の間に作って文句言われんならわかるぜ、納得する。でも半年間も放っておいて、今更そんなこと言われても困るぜ。人間だって、長年自分の土地を他人に無断で使われてると、使ってる側に所有権とやらが移っちまうって聞いたぜ。知ってたか？」

「なんで蜘蛛が法律に詳しいんだよ」

「時効取得と言うらしい。まああれは十年や二十年の話らしいがな。しかし俺は蜘蛛だから半年でいいような気がする」

「いや、よくない気がする」

「ずっとこいつを見もしてやらなかった癖に。ライダーはもつと自分のバイクを可愛がるもんだぜ。この冷酷バイク乗りめ。おまえが悪いんだ。全部、おまえが悪い。そうに違いない」

そ、そうなのかな

ちよつと自信がなくなつた孝之を庇うように、バイクがハンドルをふるふると振った。

「タカユキは悪くないよ。タカユキにはタカユキの生活があるんだから、ぼくにかかりつきりじやいられないもん。ただ、ぼく、少しだけ寂しくて、こいつに話相手になってももらったりしてたんだ。だから、追ひ払わないであげてくれないかな。……ごめん、タカユキ」

「謝ることないぜ！ こいつ、今までちつともおまえのことなんか構ってくれやしなかったじゃねえか。何もやってこなかったくせに、都合のいいときだけおまえを使ってツーリング洒落込もつだなんて、こんなバカな話はないぜ！ 言ってやれよ、俺はおまえのオモチャじゃないって！」

「オモチャのつもりで買ったんだけどなあ」

やいのやいのと騒ぐ蜘蛛と、気弱に孝之を庇うバイクの話を聞きながら、孝之はもう一度呟い

た。

「……なんだこりゃ」

2

二年前、バイクを買おうと孝之が決めたとき、母の和恵は顔をあからさまにしかめて、「お願いだから不良みたいなのはやめてちょうだいよ」と言った。

そんな言葉を聞くことになると、予想してはいた。してはいたけれど、いざ実際に聞かされてみると、嫌な気分だった。

バイク雑誌に目を落としたまま、気に入った車種をチェックしていたペンを止め　止めた途端に、久しぶりにはしゃいでいた気持ち、穴の開いた風船から空気が抜けるようにふうつと萎んでいくのを感じた。窺うように、訊いた。

（なんで不良なのさ）

和恵は大仰に溜め息をついた。（なんでも何もないでしょ、あんなブンブン五月蠅いだけのもの。足が欲しいならうちの車を使えばいいじゃないの）

（マフラーを変なのにつけ替えなければ、それほど五月蠅くならないよ。それにお金のことは、自分の金で買うから。大学、休みに入るから、バイトする）

（またそんなこと言って。自分のお金って言ったって、ご飯もこの家のローンも、大学の学費だって、全部お父さんが稼いでるんですからね）

母のいつもの口上だ。自分の金で、自分の力で　息子のそう言う言葉を聞くといつも、彼の人生が彼女の手のひらの上にあるのだということを、どうにか示そうとする。

二度目の国立大学の受験に失敗し、学費が倍もかかる三流私大に引つ掛かっただけの孝之には負い目がある。そう言われてしまうと、言葉に逆らう術がない。それでも、大学生にもなって自分が欲しいものも好きに買えないというのは、あまりに恥ずかしい気がする。

（バイクなんて危ないし、雨が降ったら乗れないでしょう。車検のお金だってかかるし、停める場所だってないじゃない。それでも乗りたいって言うなら好きにしていけど、あとで後悔しても知らないんだから）

この母は、小さな問題点を見つけ出しては積み上げていくのが得意だと、孝之は思う。昔から、孝之がしたいと言ったことに、頷いたことなど一度もない。

高校卒業後の進路選択のときもそうだった。自然と四年制大学に流れる周囲の中で、デザイン

をやりたくて美術の専門学校に行きたいと孝之が言ったときも、彼女は相手にしなかった。周囲の流れに逆らうことは、誰でも通る道であり、誰もが後悔して引き返していく道であることを、滔々と説明してみせた。

そうして入った大学の中で、孝之の生活は酷く希薄だった。節目節目で目的地を設けてくれた受験がなくなると、向かう方向もわからなくなる。自分のしたいことがなんなのかもわからないまま、ずるずると呼吸を続けていく生活。

（何処に行ったって不満くらいあるでしょ。大学を辞めるっていつでも、わざわざ一度受かったものを入りなおして、また思ってたところと違ってみなさい。後悔するんだから）

何も何の考えもなしに飛び出していこうというわけではない。反発の思いで、きちんと調べることは調べた。情報を探るうちに嫌になるのが常だった。何処を見回しても立ち入り禁止の札が掲げられているような気がして怖気づき、進める道は結局今歩いているところしかないのだと尻尾を巻く。そしてまた後悔する。じくじくと無力感に襲われる。

もう絶対辞めてやると、まだやれるかもしれないの間で浮き沈んでいく日々の繰り返し。夢なのか逃避なのかを推し量るだけの不毛な語らい。あやふやな見通しと、確かに費やした数年の間。きっかけがどうしても掴めなかった。それでも惰性でなく自分の足で歩いていく級友を見る

たび、自分の中で何かが腐っていくような気がした。

そんなだったから、友達の250ccの後ろに乗って走ったときは気分が良かった。

ずっとこんな新鮮な空気を、肺の中に送り込んでいなかった気がして。

「好きにしている」の言葉に従って、孝之はバイトで金を溜めた。ここで好きにしなければ、そのうち好きにしていると言われても何もできなくなる。

それでも夏休み中、朝から晩まで働いて得た紙幣の厚みを渡すとき、確かに孝之は思っただ。ほんとにこれでいいのかな、と。

バイクは手に入れた途端、指の間をすりりと抜けて、月極駐車場で引き籠もりになった。

引き籠もりになったバイクは、対人恐怖症になって、ホイールに蜘蛛の巣をつけたまま、外出拒否をしている。

「やめてえ、怖いよお、やだよお」

と泣きわめくバイクを孝之は宥めてすかし、なんとか社会復帰の道を模索することにした。

散々罵倒してくれていた蜘蛛も、この点においては協力的で、「おまえだってこのままじゃいけねえと思ってんだろ？」と熱い人情節でバイクを説得する。わけがわからない。

「でも、きつとみんな、ぼくを見てくすくす笑うんだよ。ニートバイクって。……怖いよ」

「そんなことねえ。どうしておまえはそんなに自分に自信がねえんだ！ このぶつといタイヤ！ 凄いじゃねえか！ 誰にも負けねえぜ！」

バイクは、うん、と頷きながらも小声で付け加える。「でも、そのぶん値段高いんだよ、ぼくのタイヤ……」

バイクを購入するとき、孝之が言ったことである。太いタイヤが格好いいすよ、と勧める店員に、でも交換するとき値が張るのがなあ、とぼやいて返したのを覚えている。その会話を聞いていたのだ、バイクは。聞いて、申し訳なく思っていたらしい。

これは厄介だ、と孝之は思う。他にどんなことを言ったかな、と考える。考えるが、バイクに向かつて喋ったことなどないから思い出せない。ちくしょう面倒くさい。どうして喋りやがるんだこのバイクは。

携帯を取り出し、ヘルプをかけた。

「もしもし、木村？ おまえさ、会社の同僚で、以前引き籠もりやってたのがいるって前言

ってたじゃん？ どうやって復帰したのかとか、知ってたら教えてくんない？」

なんだ、どうした突然？ そんなこと訊いて。おまえ、ついに大学辞めちゃったの？ よしとけてあんなに言ったのに。学生のうちだからいろいろ思うんだろうけどさ、ぜってえ後悔するって

「違う違う。えっと……弟が、さ」

弟？ おまえ弟なんていたっけ

「うん。で、半年も家に籠もってたせいか、すっかり埃かぶつちまって、外に出るのが怖いって言うんだよ。どうしてやったらいいんだろうって思ってたさ」

あー、そつだな。それならとりあえず外にでも連れ出してやったら？ えっと、弟、いくつだ？

中房？

「中房というか、中型かな」

中房か。いきなり学校とか連れてこうとすると嫌がるだろうから、どっか近場で連れ出してやんな。自然があって空気のいいとか、いいんじゃない？ おまえバイク持ってたよな。タンデムでツーリングにでも連れてってやったらどうよ

「あー」

タンデム＝二人乗り。二ケツともいう。

バイクを、別のバイクの後部座席に乗せて、タンデム走行する光景を想像してみた。

「……ちよつときついな。いろんな意味で」

そうか？ 弟、バイク嫌いなのか？

「そんなことはないと思うけど。やっぱり、人間よりは、同じバイクの方が好きなんじゃないかと思う」

人間よりもバイクが好きなのか？

声は少し考えて、神妙に、それは重症かもな

「というか、走ることもよりも、エンストして他人に怒られるのを怖がってるみたいなんだ」

おまえそんなに運転下手なのか？ まあ、とにかく身だしなみを整えてやって、軽くどつかに連れ出してやったら？

アドバイスを受け、まずは洗車をしてしまふことにした。どちらにしろ、事前に綺麗にしておかなければと思っていたのだ。

バイクをなんとか家の前の道路まで引つ張ってくると、バケツに洗剤を用意した。シャワーを勢いよくかけて、泡立てたスポンジでくまなく車体を洗ってやる。バイクは気持ち良さそうに、

サイドスタンドに身を預けている。水の雫がぼたぼたと滴る。

バイクのたつての願いによって、蜘蛛の巣は残して洗車するはめになった。リアホイールについた小さな蜘蛛の巣。その上を蜘蛛は水滴を嫌がって、もぞもぞと動き回りながら、

「気が利かねえ奴だなあ。洗車のときは、どこか痒いところありませんか、くらい訊くもんじゃねえのかよ」

減らず口を叩く。大きなお世話だ。

洗車を終え、ウエスで水滴を拭き取ってやると、みちがえた。埃で曇っていたブルーの車体が、ぴかぴかと太陽の光を受けて輝く。

バイクもすっきりした様子で、再びエンジンをかけてやると、ブルブル、としっかりした音で応えた。

「冷たかったけど、なんだかさっぱりした気分」

「行けそうか？」

逡巡してから、バイクは答えた。「うん、がんばるよ」自分の中のエンジンに、言い聞かせるような口調だった。

「タカユキ、何処行きたいの？」

なんとなく、口にすることが躊躇われた。

無意識にジャンパーのポケットにやっていた手を出し、両手をあげて肩を竦める。

「特に決めてないんだ。買った物がてら、適当に走ろつかと思ってた」

「買った物って、何処に行くの？」

「とりあえずショッピングモールとか、でつかいところがいいな。大学辞めて、就職して寮に移るんだよ。いろいろ物入りなんだ」

今まで用心して誰にも喋らないようにしていたのに、つい口を滑らせてそう言った。

母に報告してもういいやと思ったのか、おどおどしたバイクの態度にこいつなら偉そうに否定しないはずだと気を緩めたのか。自分でもわからない。

「タカユキ、就職するんだ」案の定、バイクの言葉には何の含みもなかった。「すごいなあ」

「別に凄くなんかねえよ」言わなければいけない義務のような気持ちで、「就職といっても、バイトよりは上ってくらいの位置だし」

「ふうん」

「それで、家を出るから、最低限必要なものの準備をしなくちゃいけないんだ」

「でもぼく、あまり荷物は積めないよ。車の奴らみたいに沢山物は持てない」

「今日は下調べに行くだけだから大丈夫。できるだけ安いもので揃えないと、資金が少ないからさ。いくつか見て回るつもり」

「ふうん……」

「じゃあ、行こうか。……平気だよな？」

バイクはぴかりとパッシングで答えた。孝之は頷くと、サイドスタンドを収め、シートに跨った。車体全体がぶるぶると小刻みに震えているのがわかる。タンクを挟んだ腿の間から、緊張がこちらにまで伝わってくる。「う、うまく走れるかな……」

ハンドルに手をかけ、クラッチを切った。チェンジレバーを踏み込みローに入れると、ゆっくりとアクセルを回していった。

ギョルルル、とバイクの中で音が渦巻く。二千回転。三千回転。エンジンの唸り声が大きくなり、バイクがその音に自分でびびってハンドルを振る。「ね、ねえ、大丈夫？ 大丈夫？」

握っていたクラッチレバーを、徐々に離していく。エンジンの動力を車輪に伝える。繋がるるときに一瞬だけ、ふわっと宙に浮くような感覚がした。教習所ではそれに戸惑って、随分エンストしたものだ。さすがに今は大丈夫。ゆっくりと左手を開いていった。

人生もそんな風にいけばいいのに、と孝之は思う。自分は決意を身体に繋げるときの空白に、



いつも不安になって逃げてばかりいる。あと少しアクセルを回すことができれば、その先に向かうことだってできたかもしれないのに。自分は大学に入ったときに、エンストしたままだ。

やりなおそうと思ったことは幾らでもある。受け入れて今の生活に氣力を燃やそうとしたことだつて沢山あった。でもどうしても行動に繋ぐことができずに、繋いだり切ったりを繰り返すうち、すっかり心が錆ついてしまった。そうして走ろうとすること自体やめてしまった。

これは最後のチャンスなのだ。だから絶対、退いちゃいけない。なんと言われようと。

アクセルをさらに回すと、ほんのわずかな躊躇いのあと、バイクはおっかなびっくりタイヤを転がし始めた。よろよろと走り始めたが、徐々にスピードに乗っていくと安定する。

「なんだい、走れるじゃん」

「うん。うん……大丈夫そう」

閉じ籠もってばかりいたら、気弱にもなる。走り始めたら案外大丈夫なものだ。だから、少しくらい無理をしても走らなきゃいけない。

ギアを上げながら、こいつは大丈夫そうだな、と思った。対人恐怖症といったって、なんてことない。

ちえ、単純にできてやがるんだ。

大丈夫、やれそうだという気分が、湧き上がっては萎んでいくものだということを孝之はきちんと知っていた。頑張ろうという思いだけを燃料に進むには、目の前の世界は広すぎるから。

知っていたけれど、相手はバイクだ。

人間と違って、バイクの悩みなんて、簡単なもんだ。そうだろう？

ぶすんぶするるるるがくんがつ。

エンスト。

甘かつた。

「い、い、めんつ」

青に変わった信号を前に、バイクは慌てふためいた。

歩行者信号の方を向き、点滅をじつと確認して、目の前の信号が青に変わったらすぐに飛び出せるよう身構えているようだったのだが、ちょっと構えすぎだと思っていた矢先だった。意識しすぎたのだ。自然にやればいいのに。

スタートスイッチを押して再始動させた。今度は上手くやれよ、と胸中で呼びかける。これじゃオレがエンストさせたみたいじゃないか。

後ろの車が、クラクションを一回鳴らした。

音に追いたてられるように、バイクのメーターが一気にぶおんと上がった。馬鹿、ふかし過ぎだ。そのままクラッチに繋がり、エンジンがぐくぐくとまたおかしな音をたてた。待つて、待つてとバイクは半泣き。

苛立たしげに、またクラクションが鳴った。

ヘルメットの中で溜め息をつき、孝之はバイクを降りた。バイクを押して道路の端に退けた途端、すぐ脇をかすめるようにして後続車が走り抜けていく。運転席に座った男が、睨むような視線を置き残していった。

苛ついているのはオレの方だよ。

「ごめんタカユキ……」

「四回目だ」

「ごめん。急がなきゃ、って思うと、自分が何やつてるかわからなくなっちゃうんだ……」

普通に道を走っているときはいい。前に車がいる場合は、問題なく走行できている。ついてい

くのはできるのだ。

だが信号待ちから発進するとき 特に自分が先頭るとき、バイクはきまってエンストを続けていた。そうして後続車両からブーイングを喰らい、恥をかくのは孝之だ。

「まったく、なんで信号駄目かな……」

「焦っちゃうんだ、早く行かないとって。ぼくの速度が遅かったら後ろの奴らがイライラするだろうなって思うと、緊張しちゃうんだ」

「それでエンストしてたら世話ないだろうが」

どうもこのバイクは、他人（他車？）のことを気にしすぎるらしい。みんなに迷惑をかけないように、苛くさせないように バイクにあるまじき、随分窮屈な走り方をしている。

「いいじゃねーかい。どんどんエンストしちまえ」蜘蛛が無責任なことを言う。「何が道路だ。人間だけのもんじゃねー。いつもいつもスムーズに進めると思ったら大間違いだぜえって、示してやるーってもんじゃあねえの」

「おまえは黙ってろ」

「なんだこの、人間がよう。一人で家も作れねえ半人前が俺様に指図だつてえ  
「いくぞ」

幹線道路を走る間、なるべく信号に捕まらないよう祈った。右左折するときは早いうちに言うてね、心構えがあるから　というバイクの願いに応え、ウィンカーを出す前にハンドルを叩き、曲がるぞ、と知らせてやることにした。心構えもクソも、ウィンカー出して車線変更するだけだろと思うが、バイクいわく「割り込むタイミングが難しい」らしい。割り込む、なんて表現を使うあたり、こいつは車線変更にまで後続車の顔色を窺うつもりらしい。これは既に強迫観念だろうか。そこまで気弱なことだと思う。日本の道路社会を渡っていけんぞ。

なんとか辿り着いた街道沿いのショッピングモールで、孝之はフロアを駆け回った。最低価格の値段を確認して、用意しておいたメモに書き込んでいく。一つ書き込むたびに、溜め息が一緒について出た。予算が自分の銀行口座分しかない以上、引越し資金も考えれば最低限のものしか買い揃えられないだろうと覚悟はしていたが、それすら危うい。

ジャンパーのポケットに手をつ込み、折り畳んで仕舞いこんでいたチラシを探った。また溜め息が出た。

一度就職先のオーナーに見せてもらった寮は、壁紙に染みが浮いていて、家具も潔いほどに何もついていなかった。当面、不便な生活にはなるが仕方ないと腹を括ったのだ。経験もなく、大卒も途中退学になる　そんな立場で雇ってもらう以上、苦勞は覚悟しなければいけない。

孝之が就職を決めたのは、友人の細いツテを手繰った果てにあった、小さなデザイン事務所だった。大学の疎らな授業の合間を縫って始めたささやかな就職活動も、その頃になると、どこか諦めも感じ始めていた。面接で事情を打ち明けるとき、黙って話を聞いてくれるオーナーの前で、孝之はどこかで、でもやっぱり駄目だろうな、と思っていたのだ。

だから、一緒に働きましようという返事を貰ったときは、喜びよりも戸惑いが先に立った。数日経っても実感が掴めずにいた。それは誰にも相談をしなかったからかもしれない。会話の中で自分を確認する機会がないから、いつまで経ってもふわふわしたままなのだ。

で、やっと打ち明けたらこうなっちゃうんだよな。

店の中をぶらぶらと歩き回りながら、そのことを思うと気分が重くなった。

事後承諾の形で報告する孝之を、和恵は泣きながら詰った。いたたまれなくなつて、飛び出してきたのだ。

仕方ないじゃないか。先に打ち明けていたら、今までの繰り返した。すっかり事が動き始めて、自分でも止められないところまで行き着くまでは、ブレーキなどかけられなくなかった。

「もついいの？　じゃ、帰るんだね？」

帰り道はずっと、どうやって話に折り合いをつけていくべきか、考えていた。どうやってたら母

を納得させられるだろう。自分のもやもやをわかってもらえるのだろうか。

交差点の向こうにバイク屋が見えた。何年か前に、こいつを買った店だ。わずかに見据え、脇を通り過ぎた。今日はいいやと思った。また考えよう。

「またね、タカユキ。今日は楽しかった」

月極駐車場の奥に停められたバイクは、疲れているようだったが、どこかさっぱりした声を出した。埃をかぶっていじけているより。踏み出して満足した奴は、きつとそういう声を出す。

「ちよくちよく、色々連れてくことになるけど、いいか？」

「うん。ぼくも頑張るよ。頑張つて、タカユキに迷惑かけないように走れるようにする」  
「ん」

少し、嬉しかった。バイクの機嫌をとって喜んでいてどうするんだという気もするが、元気づけることができて嬉しい気持ちは、相手が人間だろうとバイクだろうと変わらない。

いい気分で家の玄関を開けた。

途端、気持ちはさつと吹き飛ぶ。リビングに通じるドアの向こうから、錐のように激した声が漏れて聞こえた。電話をしている。母の声だった。

「なんのために産んだと思ってるのよ。あまりに勝手じゃない」

孝之は二階に上がって自分の部屋に入ると、思い切り音を立ててドアを閉めた。心の中で、わかりあおうという気持ちも叩きつけられて閉じた。

自分の中で再確認した。絶対、決意を曲げないと。怒りは決意を固着する。あんな人のことなんて、もう気にするもんか。

翌日は、早くから起き出して家を出た。外へ出ると、昇りかけの朝日に思わず目を細めた。音を立てないように玄関を閉めながら、家出みたいだなと思った。それくらい、すべきなのかもしれない、とも。

新聞屋の小型バイクたちが、家々のポストとポストの間を忙しく駆け回っている。小さい奴らがもう起きて働いているのに、駐車場で孝之のバイクは、タンクを二、三度叩いてやるまで目を覚まさなかった。今日は蜘蛛の姿もない。

やっと起き出したバイクは、言い訳がましく、「昨日は少し疲れちゃったんだ」  
まったく。たいした距離走ったわけでもないだろうに。

「今日は何処行くの?」

エンジンをかけると、ゆっくりと走り出しながらバイクが訊いた。孝之は肩を竦めた。

「決めてない。どこかぶらっと走るつもり」

「そういえば、大学はいいの? 今日はず日だけど」

「いいんだ。どうせ辞めるんだし、行っても仕方ないだろ。今日はどうかツーリングしてすつきりしてさ。帰りは友達の家にも寄りたくない。家に帰りたくない」

「何かあったの?」

道路の向こうで信号が黄色に変わり、バイクがぶるつと緊張した。後続車を窺い、孝之を窺う。赤に変わった。一瞬の間の後、ブレーキがかかる。気にせず走り抜ければいいのに。それから、もっと早く止まれよ。急いでないよ。誰も責めないから。

ごめんとバイクが呟いた。

「別に」

「え?」

「大したことじゃない。大学辞める辞めないのことで、母親と揉めたっただけ」

「ああ……」合点がいったようだった。「タカユキ、お母さんとあまり意見が合わないものね」

「なんでバイクがそんなこと知ってるんだよ」

「だってタカユキがぼくを買ってくれたときのこと覚えてるもん。納車の日だよ。トラックに揺られて、ぼくが家まで来たらね、タカユキはワクワクした顔してたけど、玄関から出てきたお母さん、眉顰めてたから。こんなものに乗るの、って」

「バイクイコール不良の乗り物なんて思ってたんだよ、あの人は。世間の言うことなんでも真に受けてさ。自分の頭で考えられないんだ」

「違うよ。危ない、って思ってたんだ。事故を起こしたらタカユキが死んじゃうって思ってたんだ。だからぼくのこと嫌いなんだよ。タカユキを危険な目に遭わせるから、ぼくのこと嫌いなんだ。だから好きなタカユキが、嫌いなぼくと一緒にいると、嫌なんだよ」

信号が青に変わった。バイクが、運動会で徒競走を走る小学生みたいな息をついた。位置について。用意。

慎重にクラッチを繋いでやると、ゆっくりと走り出す。がくがくと車体が小刻みに震えて止まるかと思っただが、エンストはしなかった。

「嫌われちゃうのは嫌なんだけど」アクセルを回して後続車を引き離してやると、バイクはほつとした様子で、「でもお母さんに嫌われてるってわかってても、嫌な気はしなかったよ。お母さん

の気持ち、わかったから」

何故だか、いらつとした。今は和恵を擁護するような言葉など聞きたくなかった。

「それにタカユキがワクワクしてくれてたから、気にならなかったんだ、お母さんに嫌われちゃっても。嬉しかったんだよ。ぼく、お店では、おまえみたいに小心者じゃバイクとしてやってくのは無理だってよく言われてたから。きつとこのまま廃車になっちゃうんだっていつも思ってた」

「んなこと気にしなくなつて、バイクの性格なんて、客にはわかんないだろうが」

「そうでもないよ。なんとなく、伝わっちゃうものなんだ。みんな、ぼくのエンジンを吹かしても、なにか物足りなさそうな顔をするんだよ。だからタカユキがぼくを選んでくれたときは、凄いだきどきして緊張した。嬉しかったんだ。ぼくもやつと選ばれたんだなって思った」

他と比べて安かつたから買ったただけだ。バイクを何台も乗りこなすようになってくると、あるいはどんな性格をしているかわかるものなのかもしれないが、孝之がバイクに触れたことがあるのは、友人のものと教習所のものだけだったから。

売れないバイクを捌くのに、孝之は格好の客だったことだろう。バイクについて詳しいわけでもないし、学生で金もない。ちよつと値段を下げてやりさえすれば、対人恐怖症気味なバイクで

も喜んで買っていく。

得意客だったら、勧められなかったわけか。馬鹿みたいだと思った。頑張つて働いて。大金払つて。

「どうしたの？」

バイクが不安そうな声を出した。

顔色を窺うような様子にいい加減うんざりして、思わず溜め息が漏れた。

海沿いの道路をずいぶん走つたが、世のバイク乗り達が楽しそうに語る、ツーリングの開放感はありませんかった。バイクが周りの車を気にしすぎるからだ。それが気になって、孝之も景色を楽しめない。

ちよろちよろしやがつてと四輪に疎まれ、バイクは隅へと寄つてしまふ。やんちゃな他の二輪にスピード勝負を挑まれるたび断つて、白けた様子で相手が離れていくたびに、バイクは口数少なくなつていった。文句すら言わずにいちいち落ち込むバイクの様子を見ると、どんどん苛立ちが溜まつていった。自分を见ているようで。

陽が暮れて、徒労感を感じながら帰路についた。家に戻る気分になれず、泊めてもらえないかと昔の友人に電話をかけた。

間延びした調子で理由を訊ねる友人の声が、妙に遠く感じた。

まあなあ、俺も以前は、色々目指してたもんだよ

それだけ聞くと、出しかけていた言葉を引き寄せ、さつと話をまとめて電話を切った。

不意に悲しくなった。

自分一人だけ、みんなからおいてきぼりを食らっているような気がした。

「ねえタカユキ」

他の友人に電話をかける気にもなくなり、自宅に向けて走っていると、赤信号でバイクが  
呟いた。「やっぱり、後悔してる?」

「……なにが」

「ぼくを買ったこと」

「なんだよ急に」

「急じゃないんだ。前から思ってた。タカユキ、買った初めのうちしかぼくに乗らなかったから、  
きつと衝動買いしちゃって後悔してるんだろ?」

「悪かったと思ってるよ。放っておいて」

「責めてるんじゃないんだ。ただ、こんなつもりじゃなかったって思ってるんじゃないかって

気になるんだよ。……わかってるんだ。ぼく、別にタカユキに選ばれたわけじゃないってことく  
らい。安かったから、タカユキはなんとなく選んだだけだもの。それくらいわかってるんだ。現  
実くらい、きちんと見てるつもり」

信号が青に変わった。

アクセルを回すとエンジン音が、居心地の悪い沈黙を少しだけかき消した。

「それでも、だからこそ、タカユキに気に入ってもらわなきゃって思ったんだ。タカユキを後悔  
させたくないって。でも、やっぱり、ぼくじゃ無理なのかもしれない。あのときのタカユキのワ  
クワクした顔、ずっと続くようにできたらなあって思ってた。でもそれには、きつと、ぼくじゃ  
だめなんだ。そうだよね」

「いや」と、こちらは言葉を断ち切るしかない。「別に後悔なんてしてない」  
したくもない。

バイクは不安そうに訊いた。「ほんと?」

窺うような様子にいらつとし、「……本当だろうと本当じゃなかろうと、答えが同じだってこ  
とくらいわかるだろ」

バイクははっとしたように口を噤んだ。

「たとえ後悔してたとしたって、過去は変えられないんだから。それならうたうた言っても仕方ない。これからを良くしていくしかないだろ。だからオレは頑張ってるんだ。頑張ってるつもりなんだよこれでも。ぐちぐち言ったまま過ごしていくなんてうんざりだから、なんとかしようと思ってる。本当か嘘かなんて訊かれても困る。訊く方は楽になるかもしれないけどな」

「ごめん。タカユキ、ごめん……」

「いちいち謝るな、うざってえ」

一度喉を通って外へ出た苛立ちは、なかなか収まらなかった。長い間ずっと胸の中で回っていた黒いオイルが漏れる。バイクへ向けるべきじゃないとわかっているのに。

無言のまま駐車場へ着いた。奥のいつもの駐車スペースに停める。

歩き出した背中に声がかかった。

「もしぼくよりいいバイクが手に入ったら、タカユキは嬉しいかな」

無視して帰路についた。そんなことはないとバイクを慰めていられる余裕が、今はなかった。

玄関を開け、靴を脱いでいると、リビングから和恵の声が漏れてくるのが耳に入った。内容までは聞き取れない。そのまま上がり框に足をかけ、階段に向かった。

「ええ。なかったことにさせてください」

リビングの前を通り過ぎるとき、早口の声が聞こえた。

はっとした。階段に足をかけたまま、耳を澄ませた。

「うちの方もまったく話を聞いていなかった状態で、戸惑っていることはご承知ください」

思わずカバンに手をかけた。事務所のオーナーから渡された名刺は、財布の中に入っている。

携帯電話も持って出た。

以前、事務所の連絡先をホームページからプリントアウトした紙だけ、自分の部屋の抽斗に仕舞ってあるはずだった。

その紙が今、電話機の横に広げられていた。

「ええ。ええ。すみませんが。はい。いずれお詫びに伺いますので」

ドアを開けると、彼女は受話器を抱えたままちらりと孝之を見て、背中を向けた。

「……なにやってるんだよ?」

「それでは失礼します」

ピ、と通話を切る電子音が、頭の奥で大きく響いた。

孝之は口を開き 言葉を出そうとして失敗した。言葉と、ずっと押し込めてきた荒々しい塊



が、喉元で詰まって頭が白くなった。

リビングを飛び出し、携帯を取り出す。

ちよっと、親御さんとお見解の不一致があるようだね

オーナーの溜め息混じりの声が聞こえる。孝之はうなだれた。

うちは別に気にしてないんだけどねえ。ただうちのことと君の家の関係がぎくしゃくしてしまつのは良くないね。こちらとしては君の意思を尊重したいとは思うんだが、まあ、親御さんの気持ちを見無視するわけにはいかないし。どうかな、もう一度きちんと話し合ってみて、それから考えてみたら？

「話なら何度かしたんです。でもずっとあの調子だから。うちのことは別にいいんです。オレ、どうせ家出るつもりですし」

君が良くてもなあ 面倒くさそうな声が聞こえた。正直、困るわけだよ。うちも忙しいから、社員のゴタゴタに関わっている暇までないんだよね

.....

よく働いてくれそうだからOKにしたけど、そんな問題があるとはうちも知らなかったわけですよ。君が真剣だっていうのはわかってるけど、こっちは仕事だからね。どうだろう、もう一度

よく考えてみるっていうのは。それからでも遅くないと思うよ

じゃあ、と逃げるように電話は切れた。電子音が耳に残った。

携帯を握り締めたまま、孝之はしばらく呆然としていた。電話をかける直前まであった希望が、砕けてあたりに散らばっている。力が抜けて、階段に座り込んだ。

シヨックだった。同時に、あたりまえだ、とも思った。いいんだよ、という言葉はどこかで期待していたのだろうか。親御さんのことなんて気にするな、という言葉をかけてもらえなくても一緒に働きましようと言われたときに、自分が認めてもらったと思い違いをしていたのだろうか。それは労働力としてであって、面倒ごとと天秤にかければ、軽く浮いてしまうほどの些細なものではないのに。

もちろん、そんなこと、わかっていた。いや、わかっていなければならなかった。それでもどこかで幼稚な思いに手を伸ばしていた自分に気付いて、まるごとすべてを投げ捨ててやりたい衝動に駆られた。

家を出て、駐車場へ向かった。無性に走りたくてたまらなかった。暴走するような走り方をする奴らを、ガキだと笑ったことがある。今はメーターを振り切っても走りたい気分だった。

「よう。なんだ、シケた面してるな」

駐車場に差し掛かると、蜘蛛が声をかけてきた。見上げると、ジリジリと明滅する蛍光灯に張った細い巣から、一本糸を垂らしてその先で揺れている。孝之は無視して奥へ向かった。

いつも停めていたスペースの前まできて、初めて気付いた。

「あいつなら、いねえぜ」

蜘蛛が溜め息をつくのが聞こえた。

「さつき、出てっちまったぜ。引き止めてんの、聞きもせずにな。おまえ、停めた後にちゃんとウ字ロック掛けなかったろう。駄目だぜ。盗ってくださいって言ってるようなもんだ。ハンドルロックなんて泥棒にとっちゃ、あつてねえようなもんだから」

啞然とした。

ぽつかりと空いた駐車スペースを見て、それから蜘蛛を見上げた。「……盗まれた？」

「違う。出てったって言ったろうが。家出だよ家出。おまえ、何か酷いことでも言っただんじゃねえか？」

「家出……？」

「何か思いつめた様子でよ。気になって、どうしたんだようって訊いてたんだが、だんまりで。

突然、今まで話相手になってくれてありがとうとって言って、そのまま切り返してどっか行っちゃ

ったよ」

地面に目をやった。アスファルトの上に微かに残った太いタイヤの痕は、入り口付近に達するところでもう見えなくなっていた。

孝之は立ち尽くした。わけがわからなかった。

バイクのくせになんで勝手に家出なんかするんだ。

「結局、最後まで何も話してくれない奴だったなあ。俺の家も持っていつちまって。また家作り、面倒なんだがなあ。これ、借家なんだよ」

「なんで」

「あ？」

「なんで、家出なんか」

「そりゃあ、持ち主様のことが、嫌になっただんじゃねえの？」

「……………」

振り向くと、蜘蛛は意地の悪い声で続けた。「ちらつと聞いたただだから知らねえけど、さっきあいつに文句言ってたろ？ いつもは放っておかれて、おまえの都合のいいときだけ走らされて、上手くやれなきゃ怒られて。嫌になるだろ。実際」

駐車するとき、バイクに投げた言葉のことを思い返した。そんなに酷い言葉だったろうか。言うべきではないと思ったのは事実だ。でも一つ言葉を滑らせた途端に、こうやって出て行かれてしまうものなのか。

ぐったりした。

バイクの機嫌をとって喜んでいた自分が、酷く虚しかった。

「なんのために買ったと思ってるんだよ……」

「あとう」

不意に、まったく別の声が聞こえた。

顔を振り向けたが、誰もいない。

いや、人がいないだけだ。バイクは沢山いる。

「あなた、タカユキさん、ですか？」

ずらりと並んだバイクの群れを見回していると、すぐ近くに停めてあったスクーターが、こつちこつちとハンドルを左右に振った。

前輪に三つ、後輪に一つ、太いチェーンロックがかけてある。大型スクーターだ。

「お預かりしている物があるんです」スクーターが言った。

「……お預かり？」

「奥にいらした、ブルーのバイクさんから。あなたのバイクさんですよね？」

よくわからないまま頷くと、受け取ってください、とスクーターはぱかりと座席のシートを開いた。

中は大きめの荷物入れになっている。スクータータイプだから、容量が大きい。こいつの主人のものだろう、剥げ欠けたヘルメットや錆取りシンナーの缶が詰められている。

一番上に、見覚えのある包みが乗っていた。メンテナンス用の説明書や、任意や自賠責の保険証書一式を、雨に濡れないようにビニルの包みに入れて、バイクの座席の下に仕舞っておいたものだ。

「これ……？」

包みを持ったまま、戸惑ってスクーターを見下ろした。

スクーターはぱたと座席のシートを閉めると、確かに渡しましたからね、と慎重に元の姿勢に戻った。

「言っておきますが」とまたこちらに前輪を向けた。「U字ロック掛けてなかったら駄目ですよ」

「……は？」

「大抵、盗難保障は、ハンドルロックとホイールロックが両方されていたときじゃないと認められないんです。U字掛けてなかったら、注意が足りませんでしたね、で終わりです。それだけ私達、盗難多いんですから」

「家出特約はねえしなあ」蜘蛛が口を挟んだ。「それにもともと、盗難保障は付けてなかったんじゃないかねのかあ」

「そうですか。まだ綺麗なバイクさんだったから、付けているかなと思いましたが。買ったばかりのバイクには、付ける人多いですし」

「買ったばかりってんではないぜ。綺麗なのは、単に乗ってやってないからよう」

「なるほど、そうですか。まあ私なんかはもう型落ちの老バイクですし、このとおりガリガリと傷だらけなので盗難保障なんて付けられてませんが。代わりに、盗まれないようワイヤーロックの数が凄いことに。拘束されすぎです。まるでマゾのよう」

「ちょ、ちょっと待って」

孝之が制止すると、スクーターは、はい？ と生真面目に応えた。

蜘蛛と顔を見合わせるようにして、ああ、と言った。前輪が小さくぐりぐりと動いた。

「つまり、バイクの家出というのはたまにあることなんです、人間の皆さんは盗難されたと認識されることが多いんですよ。で、そういうとき、保険に盗難保障が付いていればお金が下りることもあるんですが、保険会社の方も商売ですから、条件があつてなかなか難しいですね、とまあそういう話で」

「そういう話で、じゃねえよ。なんだよ。わけわかんねえよ。どっからそういう話が出てきたんだよ」

「訊かれたんですよ。僕がいなくなったら、盗難と思われて、持ち主にお金が入るんだよね、つて。あなたのバイクさんに」

「……………」

「それで、タカユキは座席の下に保険証書入れてるから、それごとなくなったら保険会社に連絡もできなくなるっておっしゃいまして。証書をタカユキに渡してと、そう言われたわけです。ユーシー？」

思わず、手に持った包みを見下ろした。

……保険金をオレに残そうとして？

「でも、それって」

「もちろん私も、これは良くないぞ、と思いましたよ。彼、思いつめているようでしたしね。引き止めようと、件のロックの条件などお話したり、そもそも盗難保障が付けられていないかもしれない、と諭したりしてみまして。どうやら彼、自分が車両保険に入られていることは知っていたようなんですが、それで盗難も保障されるものと思っていたようです。事故のときに壊れた車の代金が補償されるのが車両保険で、盗まれたときに代金が補償されるのが盗難保障。四輪さんたちの場合、車両保険に盗難保障と一緒に含まれていることが多いんですけどね。私たちバイクに関しては、車両保険と盗難保障が別々になっていることが多いんです。盗難が多くて、保険会社も元が取れないのでしょうか」

孝之はビニルの口を開けて、保険証書を引っ張り出した。

車両保険には加入している。初めてのバイクだったし、運転に自信もなかったから、事故が怖くてかけておこうと思ったのだ。だが盗難保障については、一気に値段が跳ね上がるのでつけなかった。

ビニルを探るうちに、ふと気付いた。

「自賠償の証書がない」

「車検証もないはずです。盗難保障が駄目だと知って、今度はたぶん、売りに行ったんでしょう」

「売りにつて、何を」

「自分を」

「自分をつて」

頭がくらくらした。

「……バイクの中古屋に？」

「ほとんど走っていないようだし、結構な値段にはなると思いますが……向こうも商売ですからねえ、買い叩かれなさいといひんです。無理でしょうねえ。気弱そうでしたからねえ」

「自己主張の苦手な奴だったからなあ」蜘蛛が唸った。

「おまえら、そんな呑気なこと言ってる場合じゃねえだろ。何処のバイク屋だ？」

「さあ、そこまでは」

「知らね」

「なんだよ蜘蛛。おまえあいつの友達なんだろ？ どうしてそんなに冷たいんだよ」

「おまえこそどうしてそんなに焦ってるんだ」

「どうしてつて、そりゃあ」

「いいじゃねえか別に。どうせ売るつもりだったんだろ？ ポケットの中に、中古買取の折り込

みチラシだつて入つてたじゃねえか。自分で売られようつていつてんだから、構わないんじゃないじゃねえのか」

「……………」

口を開けたが、喉の奥に上つた言葉が、ぴたつと動きを止めたまま出てこなかった。

「なんだよ？ 気付いてねえとでも思つてたのかよ、おめでたい奴だな。半年も放つておいたのに突然出して、どうしたんだつて思つのが当然だろうがよ。自活の資金に困つてることと合わせれば、それくらい気が付いて当たり前なんだよ」

「……………あいつは？」

「もちろん気付いてたよ」

「……………」

「確かにあいつは乗り物で、おまえにとつちやただの道具だ。でもあいつにはおまえしかいなかったからな。いっつもおまえのこと窺つて、顔色見て、それしかできねえ奴だったんだ。売られるときには高く売られなくちゃつて、エンストしねえように気張つてたんだよ。薄汚れたままだと高く売れないからつて、でも洗車したときにオイル垂らして泣いてたの、おまえ気付かなかつたじゃねえか。なんで俺が気付いておまえが気付かねえんだ。なあ、今頃心配してどうするつて

んだよ。遅えんだよ」

ジャンパーのポケットから、チラシをそつと抜き出した。

折り畳まれたのを広げると、高価買取の白抜き文字と電話番号が覗いた。

ああ、あんたのバイク？ 来たよ、ついさつき。買い取つてもらえないかつて

電話越しに、店員の声は面倒くさそうに答えた。

でも悪いけど、お断りさせて頂いたよ。書類は揃つてたんだが、ライダー同伴でない場合の売却は、あとあとトラブルになることが多いんで断つてるんだ。やっぱり、知らされてなかったわけか。困るんだよね。身内の問題は身内で解決してもらわないと

「あいつ、何処行きました？ 何か言つてなかったですか？」

さあ、何処行つたかまでは知りませんね。ああ、何か言つてたつてことなら、自分に車両保険がきちんとかかつてるかどうかつて、訊かれたけどね

「車両保険……………」

知らないつて言つたら、有効期日と一緒に調べてくれないかときた。困つたんだけど、教えないと帰つてくれそうもないから、ええ、調べましたよ。あと半年くらい有効になつてたけど「いけない」聞き耳を立てていたスクーターがウインカーを力チ力チさせた。

「あんのバカヤロウ、思いつめやがって……」蜘蛛がぎりぎりとかく。  
孝之は目をしばたいた。

馬鹿らしい考えが頭の中を駆け回ったが、それ以外思いつかない。人間での話だったら珍しくないニユースだが、まさか。

ぼつりと、口にした。

「車両保険金目当てに、わざと……？」

「事故を起こすんです」

「あいつ、死ぬつもりだ」

スクーターと蜘蛛が、一緒に答えた。

6

今回限りですからね、とスクーターは縄抜けならぬワイヤーロック抜けを果たして、孝之をシートに乗せてくれた。キーを挿してもいないのにエンジンがかかる。「こつやつてたまに、ご主人に内緒で散歩に行くんです」

「行き先の見当はついてんのかよ？」

後部シートに蜘蛛が這い上がるのを確認するや、アクセルを捻った。シートの上でつるりと滑った蜘蛛が、慌てて孝之の背によじ登る。「気をつけろい！ 巣つくってねえんだ、巢！」

スクーターのエンジン音が夜に響く。交差点に行き当たり、孝之はヘルメットのバイザーを上げて首を捻る。

「バイクが自殺しようとしたら、おまえ、どうすると思う？」

「人間の場合はどうなんだ？ どうやって自殺する」

「首吊りとか、身投げとか」

「バイクには首がない。身投げはありうる」

「じゃあ海の方が。いや、保険金のことを考えたなら、失踪じゃ駄目なんだ。盗難保障がないんだから、失踪じゃ保険金が降りない。あいつもそれはわかってるはずだ。壊れて発見されないといけない」

「だな。とすると、ガードレールに飛び込むとか、崖から飛び降りるとか……あとは電車と根性勝負とかな」

孝之はちよつと考えてから、首を振った。

「いや、それはないと思う。あいつ、人に迷惑かけることに凄く過敏なんだ。針路変更にすら気を遣ってるのに、大勢の人が乗ってる電車を止めるとか、そんなことはできない」

「なるべく迷惑かけない死に方を選ぶ、か。そうするとガードレールを凹ませることすら避けるかもしれない。崖から飛び降りても業者が車体回収に苦労するとか？　するつてえと」

「廃車買取業者」

「ああ？」

「事故でスクラップになったバイクを買い取って、部品をリサイクルして儲ける専門業者がある。その前で事故れば迷惑にならない。むしろ喜ばれる」

「そこまで氣い遣うかよ！」

スクーターのハンドルを、郊外に通じる道の方へ切った。業者が所有しているスクラップ保管の空き地があるのだ。バイクと一緒に一度だけ前を通ったことがある。

アクセルを回しこみ車体を加速させ、冷たい夜の中を走った。

「どうしてだろう」

やりきれなくて、呟いた。

「どうしてこんな馬鹿なことするんだろうあいつ」

「おまえの役に立ちてえんだよ」

風の唸りに全身を包まれる。

ぱたぱたとなびくシャツの裏から蜘蛛の声がした。

「おまえに必要としてもらいてえんだ。他にどう生きていいかわからねえのさ。おまえに認めてもらいたいって、それだけを自分の存在価値にしちまったんだ」

「なんでそこまでオレを？」

「親みたいなものだからさ」

「そんなの間違ってるだろ」

「そうさ。間違ってるさいろいろ。でもつい、認められたいって思っちまうんだ。子供なんだよあいつ。子供だからおまえに認められることでしか、自分を認めてきてねえのさ」

連なった車のライトの光が、次々に視界に飛び込んだ。立ち並んだ信号が一斉に赤を示し始める。

国道を逸れ、脇に入った。すぐに他に走っている車がなくなる。夜が濃くなった。

ふと思った。大学を受ける前に、自分は何故、母に逆らって専門学校を受けようとしなかったのだろう。言葉にすれば良かったのに。不満を抑えて、物分り良く分別のある生き方をしてきた



のはどうしてだ。もう大人だと認められたかったのか。自信がなかったのか。「なめてるんだよ」

自分の頭の中で、どんな筋道を通ってそんな言葉が出てきたのかわからない。今度は蜘蛛は言葉を返さなかった。

構わず、言葉が勝手に盛り上がって溢れた。

「なんのために買ったか？ 確かに、自分のために買ったさ。あいつのためじゃない」  
孝之は思う。不満なのはなんなのだろうと。

何がこんなにやるせないのか。苛立たしくて仕方ないのか。

「でもそれだけじゃないか。それだけのことだろ。自分よりいいバイクが手に入ったら、オレが嬉しいかだって？ ふざけんなよ。そうやって顔色窺って遠慮してれば褒められるとも思ってるのかよ。なめてんだよ。結局あいつ、オレの気持ちをなめてんじゃねえか」

視界が滲む。スピードメーターは上がっていく。道は一直線で信号もない。こんな道ならいつも走れるだろう。

風が逆走してくる道を切り裂いて孝之は走る。暖かい空気と冷たい空気の層を交互にくぐりぬける。夜の中に自分が一人。自分も風になったように思う。

道の脇には田圃が広がっている。視界に次々と現れては、すぐに後ろに置き去りになる。遠くに一筋の光が見えた。

バイクのライトだ。

道路を右から左に横断するように、脇の空き地に向けられている。

思わず孝之はアクセルを握っていた手を緩めた。伸びたライトの線の元、街灯に照らされてブルーの車体が微かに浮かんで見えた。ライトはためらうように、ちよつとだけ前へ進み、止まった。戻る。進んでは止まって、また戻る。きつと、いつも進んだり戻ったりしてばかりなのだ。いいよ、それで、と孝之は思うのだ。

ライトの射す道筋の脇、空き地の中には、夜より濃い暗い影が重なっている。横たわったバイクの山。バイクの墓場だ。事故か、古くなって廃車になったのか、無数のバイクがうず高く積み上げられている。巨大なクレーンが闇の中に釣り下がっている。

ライトの光は、その空き地の奥のブロック塀に、一直線に向けられている。のっぺらぼうの石塀の上に、一体何を見ているのだろうか。

と、バイクが後退した。勢い良く。

道路の端ぎりぎりまで。

助走の距離をとったのだ。

追突して、大破するために。

「おい！」

孝之は叫んだ。まだ遠い。エンジンの音も聞こえていないのだ。声が聞こえるわけもない。

「やめろ！」

バイクは気付かない。自分の中の最後のアクセルを開く瞬間に備えて、じつと止まったままにいる。やめろ、そんなアクセルワーク間違いだばかやろう。孝之は精一杯アクセルを捻る。応えてスクーターが加速する。叫びながら、孝之はホーンスイッチに手を伸ばした。気付くか。無理か。頼むよ。気付け

ロケットの爆音のような大音量に、危うく孝之が転倒しかけた。

「すみません。実は私、改造車なんです」

「くそ、違法けどよくやった！」

道路の上を竜のように伝わった音が、空気を振動させるのが見える。

気付いてライトが、ぴくつと揺れた。

おそろおそろと、こちらを振り向く。

上向いたライトと目があって眩しい。

「おーい！」

孝之は走りながら叫んだ。

バイクはその場から動かなかった。孝之に気付くと、微かに首を左右に振った。ライトがすつと地面に落ちた。光が弱々しくなって、暗くなる。

孝之は口を開きかけたが、言葉を準備していなかった。エンジンの音。風の音。叫ばなければ聞こえない。

何を叫べばいいのだろうか。孝之は叫んだことなどないのに。

一瞬考え、また口を開いた。

「走るの、結構、楽しいぜ！」

俯いていたバイクが、またライトを上げた。

「よう」

バイクの近くでスクーターを止めると、なんと間の抜けた挨拶をした。うん、とバイクも間の抜けた二乗。

走りすぎて加熱したスクーターのエンジンを切る。頼りなさげなバイクの車体が、静かにエンジンを回している音が聞こえた。引き籠もりとはいえ、これだけエンジンを回せるのだから心配ない。走れるはずさ。時速200キロくらいで。

「なあ」

「うん」

「ここらへん走ったことなかったけどさ」

「うん」

「他に車いなくて気持ちいいな」

「そう？」

「ああ。こういう道なら、きつと楽しいぜ。スピード出したりしてさ」

黙っているのがなんとなく嫌で、喋り続ける孝之に、バイクはときどき言葉を挟もうとする。

「ごめんとか、迷惑をかけてとか、ちゃんと売られるからとか、なんとか。」

孝之はスクーターのホーンスイッチに手をかけた。

至近距離で思い切り鳴らしてやると、バイクはほとんど仰け反った。

「……タカユキ、それ、まずいよお。警察とか来るよお」

「うん。ほんとまずいなこれは。なんなんだこれ」

「ご主人の嗜好は私にもわかりません。見た目わからない改造するのが好きらしい」

「やっぱオレ、バイク狂いの気持ちってよくわかんないや。走るのは気持ち良かったけどな。こんなホーンのついたバイクにや乗れないぜ。ただでさえホーンの音って耳障りだしさ。控えめなくらいでちょうどいい」

な、と言ってバイクを見やると、バイクはおそろおそろホーンを鳴らしてみせた。気の抜けたブオンという音が響いた。あのうすみません、という感じの、対人恐怖症仕様の特別ホーンだ。思わず笑った。素敵な音だと。

バイクも笑った。エンジンの音がぐるぐるん高くなった。ウインカーがかちかち好き勝手明滅した。

「タカユキ」

「今夜はどうか、走りにでも行こうぜ。家飛び出してきて決まり悪いしさ」

「うん！」

バイクは激しくライトを上下させた。何やら感極まった様子で、ごめんとありがとと最早よく聞き取れない言葉を繰り返した。

ぼたぼたと液漏れさせるバイクを見ながら、これはあとで点検に出さないといかんと思った。バイクの涙の成分はよくわからないが、ブレーキオイルだったら大変だ。

7

家に戻ったのは、翌日の早朝だった。

新聞屋のミニバイクたちに混じって、家の前でバイクを停車させた。どこまで行って、どういう道を辿って帰ってきたのか、よくわからない。

ややあって、玄関の扉ががちゃりと音を立てた。カギを開ける音がなかったのは、カギが閉められていなかったからだ。扉はずっと、家出息子が戻るのを、息をひそめて待っていたらしい。出てきた母は、ちぐはぐでおかしかった。孝之の方へ早足になりかけて止まり、手を伸ばしかけて下ろし、口を開きかけて閉じ、顔を崩しかけて眉を顰める。

「ただいま」

孝之が言つと、彼女はちよつと考えてから、黙って一つだけ頷いた。くるりと背中を返し、家の中に引っ込む。

孝之は笑い、バイクと顔を見合わせた。

「またあとでな」

「タカユキ、ここの路上駐車だよー」

「ちよつとだけだよ。すぐ戻る。がつつりやられるのが長引かなけりゃね」

玄関をくぐり、ヘルメットを壁に吊るした。グローブを外してカバンに仕舞う。

靴を脱いでいると、気配がした。顔を上げると、母が腕を組んで、唇をひん曲げて孝之を見ていた。

ちらりと玄関の向こうに視線を飛ばし、母は言う。

「バイクに乗るなら乗るで、蜘蛛の巣くらい掃除しなさいよ。みつともない。せつかくのタイヤが台無しじゃない。デザイン事務所に入るのに、そんなんでどうするの」

違つよ、と孝之は肩を竦めた。

「蜘蛛の巣つきバイク、これから流行るんだってば」